

バラ切り花における栽植密度の影響

～栽植密度を高めて収量アップを目指す～

松波愛理（東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成30年2月15日掲載】

【要約】

豊橋市のバラ産地において、栽植密度を慣行より高めて収穫本数及び品質への影響を調査した。その結果、プランター当たり栽植本数8株区は、慣行の4株区と比べ収穫本数が約40%増加し、茎径に差はみられなかった。なお、収支を試算したところ、8株区は4株区の約2倍となった。

1 はじめに

豊橋市のバラ産地では、近年の単価低迷を受け、増収により所得向上を図りたいという声が上がっている。当産地では、これまで品質を重視した生産により他の産地よりも疎植であったため、栽植密度を高めて収穫本数を増やすことが単収増加の手段の一つである。しかし、密植に伴う品質低下を懸念して、産地として取り組むことが難しかった。

そこで現地において、栽植密度を慣行より高めた実証ほを設けて、収穫本数及び品質への影響を調査した。

2 実証区、耕種概要及び調査方法

(1) 実証区

4株区（慣行）	4株/プランター	(約3.9株/m ²)
6株区	6株/プランター	(約5.9株/m ²)
8株区	8株/プランター	(約7.9株/m ²)
10株区	10株/プランター	(約9.8株/m ²)

(2) 耕種概要

平成27年11月に県育成品種「愛知1号」を各区4個のプランターに定植した。プランター内の培地は軽石ピートモスで、1条植えとした。当産地の慣行に従い、液肥による施肥、アーチング仕立てで管理し、平成28年3月に出荷を開始した。

(3) 調査方法

調査期間は平成28年4月から平成29年3月までとした。縦に4個設置したプランターのうち、中央の2個のプランターで調査を行った。

毎月1回、階級別収穫本数を調査した。階級は産地の出荷規格である切り花長50cm以上、60cm以上、70cm以上の3段階とした。また、茎径は、平成28年12月に切り花長60cm以上の各区10本を調査した。

なお、JAの月別単価データから各区の販売額（収入）を算出し、農家からの聞き取り及び経営モデルを参考にして収支を試算した。

3 結果及び考察

(1) 収量調査

1 m²当たりの収穫本数は、慣行の4株区で63本と最も少なく、8株区及び10株区では4株区に比べ約40%増加した。階級別にみると、販売単価で有利な切花長60cm以上の本数は、4株区45本、6株区51本、8株区60本、10株区62本となり、8株区及び10株区では4株区に比べ約30%増加した(図1)。8株区と10株区はあまり差がなかったことから、プランター当たり栽植本数は8株が適当と考えられた。

密植により茎が細くなることが懸念されたが、茎径はいずれの区も4.7~4.9mmで区間差はなかった(表1)。

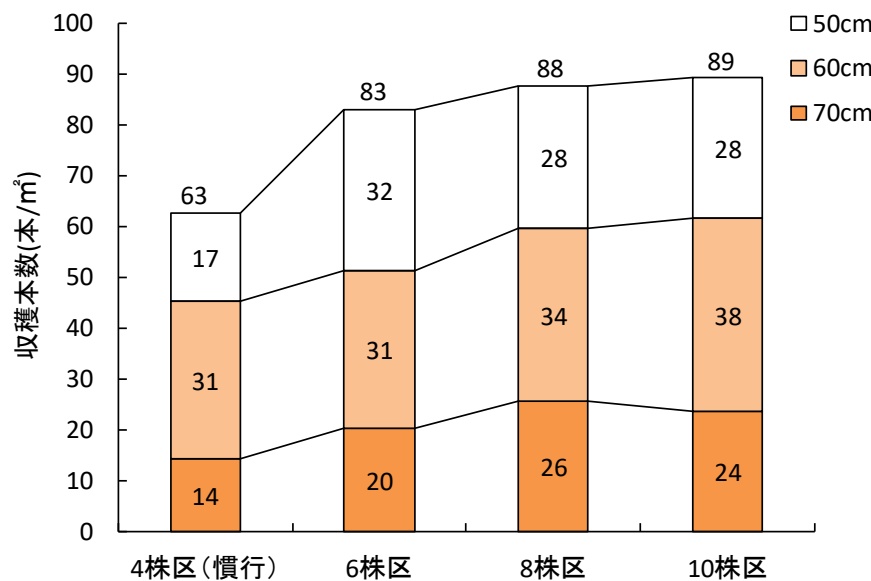


表1 茎径(単位: mm)

実証区	茎径
4株区(慣行)	4.8
6株区	4.7
8株区	4.8
10株区	4.9

図1 各区の1m²当たり階級別収穫本数

(2) 収支の試算(概算)

収入は、収穫本数に比例して10株区で最も高く、次いで8株区、6株区、4株区の順になった。しかし、株数が多くなるほど種苗費、労働費、出荷資材費が大きくなることから、収支は8株区、10株区、6株区、4株区の順に良くなった(表2)。

表2 各区のm²当たりの収支の試算(単位: 円)

	4株区	6株区	8株区	10株区
収入	5,536	7,232	8,111	8,381
費用				
種苗費	420	630	840	1,051
労働費	1,364	1,736	1,912	1,951
出荷資材費	327	419	435	476
その他 ¹	1,937	1,937	1,937	1,937
収支	1,488	2,509	2,986	2,966

1 動力光熱費、肥料費、農業薬剤費等

4 まとめ

今回の調査では、プランター当たり栽植本数8株とすると、慣行の4株に比べ収穫本数が約40%増加し、茎径に差はみられなかった。

収支の試算からは8株区が有利と考えられたが、これは概算であるため、さらに経営調査が必要である。一般的にバラは、定植後約3～5年収穫し続けるものであり、品種間差が大きいことから、今後は、複数年の調査や異なる品種での検証を行う予定である。

Copyright (C) 2018, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.